

2022 年 2 月

食料安全保障月報

(第 8 号)



令和 4 年 2 月 28 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみならず、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022年2月食料安全保障月報（第8号）

目次

概要編

I	2022年2月の主な動き	1
II	2022年2月の穀物等の国際価格の動向	3
III	2021/22年度の穀物需給（予測）のポイント	3
IV	2021/22年度の油糧種子需給（予測）のポイント	3
V	今月の注目情報 ロシアの中国向け小麦輸出拡大なるか	4

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	7
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	8
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	9
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	11
5	FAO食料価格指数の推移	15
6	食品小売価格の動向	16

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2021/22年度の輸出量は過去6年で最低
	＜カナダ＞	2021/22年度末在庫は減産により過去最低の見通し
	＜豪州＞	2021/22年度の実産量、輸出量は史上最高の見通し
	＜EU27+英国＞	2022/23年度の冬小麦はおおむね良好に越冬
	＜中国＞	2021/22年度の輸入量は前年度に比べ23.3%減少する見込み
	＜ロシア＞	ロシア政府は輸出関税を累進式にし、輸出枠800万トンを設定
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	生産量史上第2位、エタノール用需要増、輸出減の見通し
	＜ブラジル＞	南部の高温・乾燥で単収下方修正も、生産量史上最高の見通し
	＜アルゼンチン＞	高温・乾燥も、生産量史上最高、輸出税は継続
	＜中国＞	生産量史上最高、消費量も史上最高の見通し
3	コメ	14
	＜米国＞	2021/22年度の期末在庫が対前年度比で23%以上減少の見通し
	＜インド＞	2021/22年度の輸出量が上方修正
	＜中国＞	2021年のコメ輸入量が史上最高
	＜タイ＞	2020/21年度の輸出量が上方修正
	＜ベトナム＞	2021年の輸出量は約627万トンの見通し

II 油糧種子

大豆	20
<米国>	生産量は史上最高も、輸出減の見通し
<ブラジル>	南部の高温・乾燥で単収下方修正、生産量は減産見通し
<アルゼンチン>	高温・乾燥で単収下方修正、輸出税は継続
<中国>	減産見通し、消費量・輸入量は経済成長の減速で下方修正
<カナダ>	西部での高温乾燥の影響で減産見通し

特別編①「FAO 食料価格指数 (FFPI : FAO Food Price Index)」

特別編②「種苗をめぐる情勢について」

【利用上の注意】

表紙写真：

ブラジル南部のパラナ州の収穫を待つ大豆(2月6日撮影)

(概要編)

I 2022年2月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の2021/22年度の作況については、北半球はほぼ確定したが、これから作付け・収穫が行われる南半球は今後も変動する可能性。

品目別にみると、2月の米国農務省（USDA）の需給報告では、小麦については、生産量は史上最高となるものの、米国やカナダの減産により世界の期末在庫率は前年度を下回っていることに加え、ロシアの穀物輸出割当の設定等から、国際相場は高い水準で推移しており、今後も注視が必要。

一方、大豆・とうもろこしについては、米国で大豆が史上最高の生産量となるも、南米の乾燥の影響で、生産量が先月に引き続き下方修正されたため、期末在庫は依然としてタイトな状況であり、南半球の状況を中心に引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：1月）については、主に植物油（179→186）及び乳製品（129→132）が上昇した影響により、12月から再び上昇に転じた（134→136）。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年10月に直近5年間の最高値を記録して以降は下落傾向で推移。

ウクライナ情勢が緊迫化する中で、現時点では、我が国への食料供給への直接的な影響は確認されていない。一方、原油価格や穀物価格は上昇する動きを見せており、今後の国際貿易や国際相場の動向に注意が必要。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021年7月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



1 ブラジル産大豆の生産見通しは南部の乾燥の影響で下方修正

前年 11 月から継続したブラジル南部の乾燥により、ブラジル食料供給公社 (CONAB) 2 月の穀物レポートでは、収穫期を迎えている 2021/22 年度の大豆の生産見通しを前月から 1,500 万トン下方修正し、1 億 2,550 万トン(対前年度比 9%減)の見通し。同様に、南部で栽培され、収穫期を迎える夏とうもろこしについては、前月から 40 万トン下方修正し、2,440 万トンとし、今後大豆の収穫後のほ場に作付けされる冬とうもろこしとの合計で 1 億 1,230 万トン(対前年度比 29%増)の見通しである。

米国農務省 (USDA) の分析によれば、1 月末にはブラジル南部で降雨があったものの、大豆や夏とうもろこしへの乾燥の影響を回復するには遅かったとみている。

なお、アルゼンチンでも、高温乾燥の影響を受け、ブエノスアイレス穀物取引所が生産見通しを 4,400 万トンから 4,200 万トンに下方修正した。パラグアイ農牧省は、2021/22 年度大豆に関し、前年度の 1,000 万トンから高温乾燥により半減する見通しを公表した。

2 ロシア、ウクライナの穀物輸出動向

穀物に輸出税を課しているロシアは、さらに 2 月 15 日から 6 月 30 日まで、小麦に 800 万トンの輸出枠、大麦、ライ麦、とうもろこし計で 300 万トンの輸出枠を設定した。それに先んじて 2 月 8 日には、206 業者に割当数量を公表した。一方、ウクライナは小麦、とうもろこしとも史上最高の豊作の見通しである。

両国の世界の穀物貿易に占めるシェアは、USDA によれば、小麦 29%、とうもろこし 19%、大麦 31%と大きな地位を占めている。主要輸出先は中近東などが中心で、我が国は両国から上記の穀物はほとんど輸入していない。今年に入り両国間では政治的緊張が続いていたが、2 月 24 日にロシアはウクライナへの侵攻を開始した。今後、国際穀物貿易や価格に与える影響について注視していく。

3 2022/23 年度の小麦の作付け、生育状況

国際穀物理事会 1 月レポート等の情報によれば、北半球は冬小麦が越冬による休眠期を迎えている。2022/23 年度の世界の小麦全体の収穫面積については、肥料価格の高騰により、過去 5 年平均は上回るも、前年度よりわずかに減少の 2 億 2,660 万ヘクタール。生産量は単収の改善から前年度比 1%増の 7 億 9,200 万トンの見通しである。

欧州の EU 地域は、フランスで菜種への転換等により収穫面積は減少しているが、おおむね良好に休眠期を迎えているとみられる。なお、イタリアやスペインでの乾燥による影響が懸念されている。

ロシアでは、収穫面積は前年度並みで、前年末の降雨により土壌水分は良好で、冬枯れ被害が減少する見通しで、おおむね良好に休眠期を経過しているとみられる。

中国は、作付け期の秋の降雨過多により作付けが遅れたが、12 月に入り、冬小麦産地は日照条件、土壌の水分含有量に恵まれ、おおむね良好に休眠期を迎えている。

米国は、冬小麦の作付面積は 2 年連続で増加しているが、グレートプレーンズ南部では乾燥による作柄への影響が懸念されている。

冬小麦については、休眠明けの春の天候が単収に大きな影響を与えるといわれていることから引き続き注視が必要である。

II 2022年2月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、1月末、280ドル/トン台前半で推移。2月に入り、米国冬小麦産地での降雨はあったものの、ウクライナ情勢の緊張を受けて上昇し、2月中旬には290ドル前半まで上昇した。その後、ウクライナ情勢の一時緩和で下落も、米国冬小麦産地の乾燥に加え、ウクライナ情勢の緊張を受けて上昇し、2月下旬現在、340ドル/トン前後で推移。

とうもろこしは、1月末、240ドル/トン半ばで推移。2月に入り、南米の短期的な降雨予報等で一時値を下げる場面はあったものの、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥による減産懸念や原油価格の上昇、ウクライナ情勢の緊張等から上昇し、2月下旬現在、270ドル/トン前後で推移。

コメは、1月末、450ドル/トン台前半で推移。2月に入り、旧正月により貿易活動が活発でなくなったことから、2月中旬には440ドル/トン台半ばまで値を下げた。その後、パーツ安を背景に海外需要の低迷が重しとなり更に値を下げ、2月下旬現在、430ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、1月末、540ドル/トン台後半で推移。2月に入り、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥による減産懸念やUSDAの2月需給報告や南米の現地機関の見通しが大豆生産の大幅な減少となったことに加え、ウクライナ情勢の緊張等から値を上げ、2月下旬現在、610ドル/トン前後で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2021/22年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から440万トン下方修正され27.8億トン。消費量は、前月から160万トン下方修正され27.9億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り28.4%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで下方修正、コメで上方修正され、穀物全体で下方修正され27.8億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこしで下方修正、コメで上方修正され、穀物全体で下方修正され27.9億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、5.1億トンの見込み。

期末在庫量は、7.9億トンと前月予測から下方修正、期末在庫率は前月からわずかに下方修正された。

(注：数値は2月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2021/22年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.1億トン。消費量は前年度を上回り6.2億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を下回り、16.9%となる見込み。

(注：数値は2月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報：ロシアの中国向け小麦輸出拡大なるか

2月4日、北京冬季五輪開会式に伴い、プーチン大統領が訪中し、習近平国家主席と会談し、中露間で、今まで植物防疫の関係上、地域限定されていたロシア産小麦・大麦の輸入に関し制限撤廃に合意した。しかし、ロシア産小麦については90ドル/トンを超える輸出税に加え、2月15日から6月30日までの間800万トンの輸出枠が設定されている。両国の貿易動向を中心にまとめた。

1 中露間の穀物貿易にかかる合意の内容

中国外交部などの公表資料によると、2月4日に、ロシアと中国は、スポーツ協力や天然ガスの貿易等に加え、農産物の貿易(小麦、大麦、アルファルファ)を含む15の文書に調印した。ロシア動植物検疫監督庁によると、ロシア産小麦、大麦の輸入については、植物防疫の関係上、今までロシア東部のシベリア連邦管区のアルタイ地方など7地域に限定されていたが、これを撤廃しロシア全土を対象とすることで合意した。アルファルファについてもロシア産の輸入が解禁された。

ロシア国内の報道によると、従来ロシアから中国への小麦等の輸出はアルタイ地方など7つの地域に限って認められており、対中国輸出量は少なかった。今般ロシア全土からの輸出が可能になったことにより、小麦の対中国輸出が活発化すれば、年間100万トンを超える輸出も可能とのロシアの穀物輸出業界の声も報じられている。

表 中国の米国とロシアからの小麦、とうもろこし、大豆輸入

	輸入先	2021年				(参考2020年)	
		輸入量	シェア	順位	対前年比	輸入量	輸入量
小麦	豪州	273	28	1	151	109	
	米国	273	28	2	53	178	
	カナダ	254	26	3	11	230	
	ロシア	5	1	7	▲32	7	
	計	972	100		19	815	
とうもろこし	米国	1,983	70	1	357	434	
	ウクライナ	824	29	2	31	630	
	ブルガリア	14	1	3	▲45	26	
	ロシア	9	0	4	▲35	14	
	計	2,836	100		151	1,130	
大豆	ブラジル	5,815	60	1	▲10	6,428	
	米国	3,231	33	2	25	2,589	
	アルゼンチン	375	4	3	▲50	746	
	ロシア	54	1	6	▲22	69	
	計	9,653	100		▲4	10,033	

注：計にはその他の国を含む。出典：中国海関統計を農林水産省で加工

2 中国の穀物輸入の現状

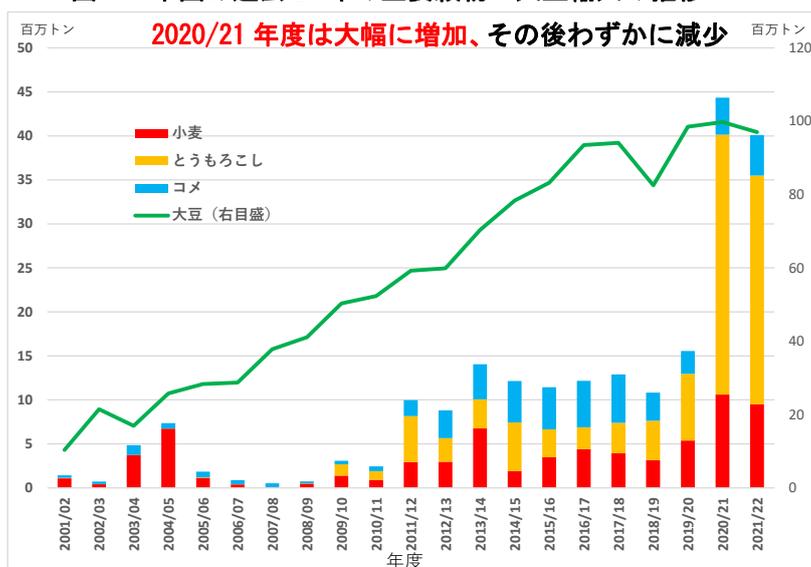
中国の穀物輸入は、大豆については、近年大幅に増加してきた。

2020年には、アフリカ豚熱

(ASF)からの豚肉生産の回復により、飼料向け需要が増加し、輸入量は史上最高の1億トンを超えた。さらにASFの感染拡大を機に、養豚経営の大規模化が進み、レストランからの食品残渣に依存していた小規模経営から、とうもろこしや大豆を原料とした配合飼料を給与する大規模経営に移行してきたことから、とうもろこしの飼料向け需要が大幅に伸びた。この結果、とうもろこし

価格が小麦の価格を上回り、代替として小麦の飼料向け需要も増加した。大豆と同様に、ASFの影響からの回復による豚の飼養頭数の増加により、2020年の小麦、とうもろこしの輸入も大

図1 中国の過去20年の主要穀物・大豆輸入の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2022.2.9)を農林水産省で加工

幅に増加した、

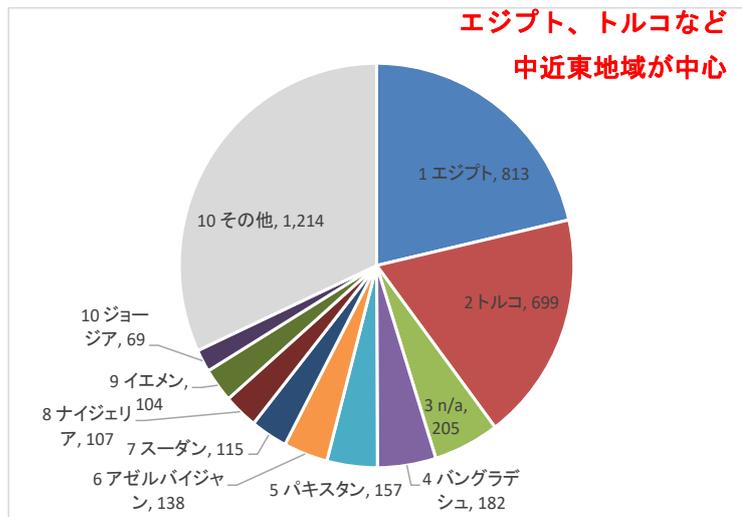
2021年は、小麦の輸入量は引き続き増加し972万トン（対前年比19%増）で、史上最高の豊作となった豪州産が1位で273万トン（対前年比2.5倍）、僅差で米国产273万トン（同53%増）、カナダ産254万トン（11%増）と上位3か国で8割以上を占めている。

また、とうもろこしの輸入量は2,836万トン（対前年比2.5倍）と史上最高となった。主に米国とウクライナから輸入しているが、米国からの輸入量が1,983万トン（同4.6倍）と大幅に増加し、ウクライナからの輸入量824万トン（同31%増）を上回り、順位が逆転した。

一方、大豆については、搾油マージンの悪化などによる搾油需要の低下などもあり、輸入量が1億トンを下回る9,653万トン（対前年比4%減）となった。ブラジル産が5,815万トン（対前年比10%減）と1番多いものの、前年よりシェアが低下し、米国产が3,231万トン（同25%増）と増加した。

2021年で見ると、小麦、とうもろこし、大豆とも、米中通商協議一次合意の影響もあり、米国产穀物の輸入が増加し、とうもろこしは1位、小麦、大豆も2位と主要輸入先となっている。一方、ロシア産については、小麦5万トン（前年比32%減）、とうもろこし9万トン（同35%減）、大豆は54万トン（同22%減）と、輸入量は米国产より2桁以上少なく、いずれも前年より減少している。3品目とも2021年2月以降継続的に輸出税が賦課されていることが要因とみられる。

図2 ロシアの2020/21年度の小麦輸出3800万トンの内訳

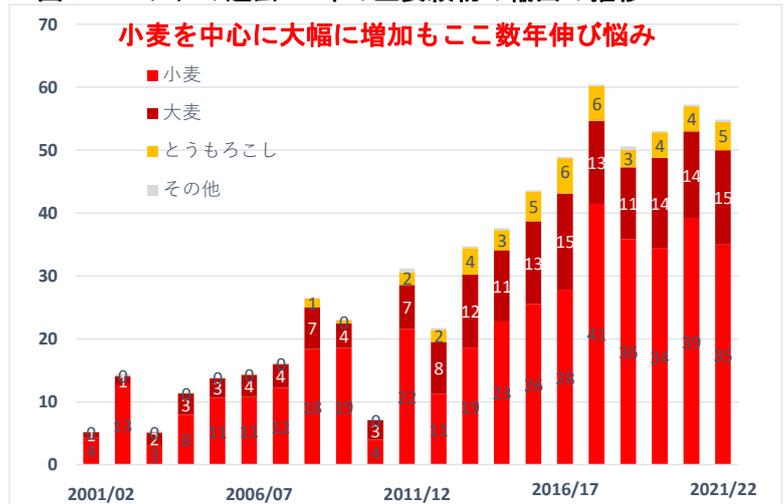


出典 ロシア税関資料を農林水産省で加工 n/aは仕向け先不明

3 ロシアの穀物輸出の現状

ロシアの穀物生産は年々増加し、ここ20年間で大きく拡大してきた。米国農務省（USDA）によれば、2021/22年度の小麦については、生産量は冬枯れの影響を受け7,550万トン（クリミアを除く以下同じ）と前年度より減少し、輸出量も3,500万トンと減少しつつも、EUに次いで世界第2位の輸出国となっている。2021/22年度のとうもろこしの生産量は、史上最高レベルの1,500万トンとなり、輸出量も450万トンに増加している。

図3 ロシアの過去20年の主要穀物の輸出の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2022.2.9）を農林水産省で加工

小麦の輸出先は主に地理的に近いエジプトやトルコといった中近東地区が中心であるが、2021/22年度はイラン向けが増加している。さらに、2018/19年度、2019/20年度の豪州の干ば

つに乗じて東南アジア諸国にも輸出先を広げた。

ロシア産小麦の対中国向け輸出が伸びなかった背景には、輸出税や輸出割当の影響に加え地域限定が大きかったとみられる。さらに、輸入が認められていたシベリアのアルタイ地方などから中国の需要の大きい沿岸部までコストがかかる遠距離の鉄道輸送となること、さらに鉄道の軌道幅が両国で異なるため、国境で貨車の積替えが必要となり更にコストがかかることなども挙げられる。

油糧種子については、もともとロシアはひまわり種の生産・輸出が盛んで、USDAによれば、2021/22年度は1,550万トンと史上最高が見込まれている。大豆については、もともと生産量はひまわり種と比べ少なく、輸入国であるが、同じく、2021/22年度の生産量は史上最高の480万トンとなる見通しである。これまでは、中国向け輸出を目的に栽培していた極東連邦管区のアムール州等が主産地であったが、最近では、畜産向け需要の多い中央連邦管区の生産が上回っている。アムール州から中国向けの輸送コストは安い。しかし、2021年2月から輸出税（当初30%。後に20%に引き下げ）の導入により対中国輸出が影響を受けたとみられる。

4 世界の穀物貿易への影響

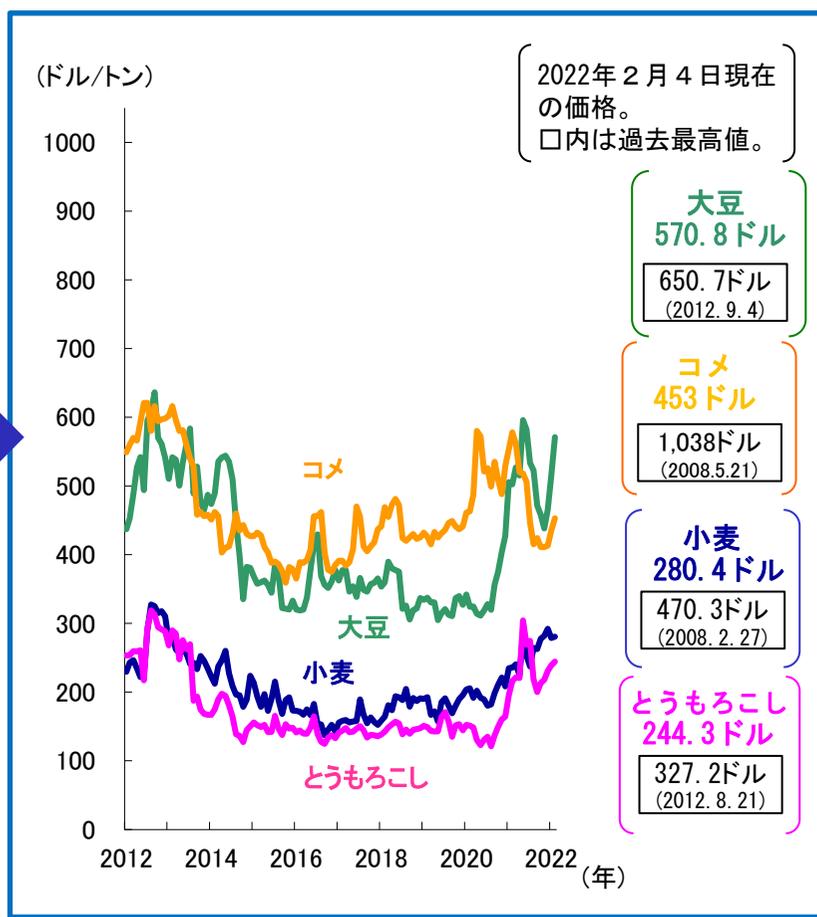
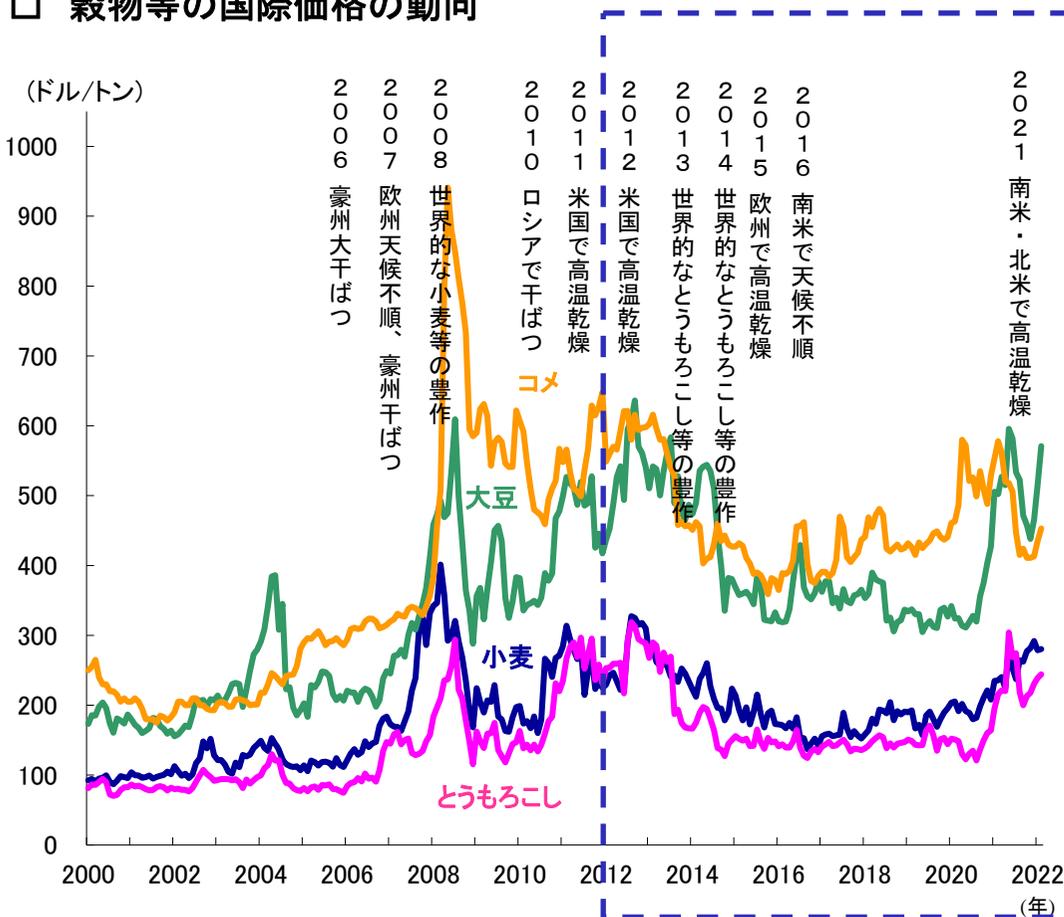
今回のロシアと中国の合意により、ロシアの穀物主産地の西部からの中国向け小麦輸出が可能となった。従来の鉄道輸送ではなく、黒海からバルク船で中国の沿岸地域まで輸出できると期待されている。しかしながら、ロシア産小麦には現在90ドル/トンを超える輸出税が課せられており、他地域向けも含め輸出が低調なこと、2022年2月15日から6月30日まで小麦に800万トンの輸出枠が設定され、2月8日には業者に枠がすでに配分されたことから、新規需要として中国向け小麦輸出がすぐに増加するとは考えにくい。

なお、中国は、2012/13年度以降、ウクライナ産のとうもろこしの輸入を開始し、2021年には800万トン以上輸入しており、ロシアからの小麦やとうもろこしの輸入量を大きく上回っている。2月24日にはロシアがウクライナに侵攻した。我が国はロシアやウクライナからの穀物輸入はほとんどないが、中国は同日の外交部の会見で両国から農産物を輸入するとしている。両国とも中近東地域を中心に、東南アジア等へも穀物の輸出市場を広げていることから、中国を含む輸入国への影響も含め世界の穀物需給への注視していく。

資料 1 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



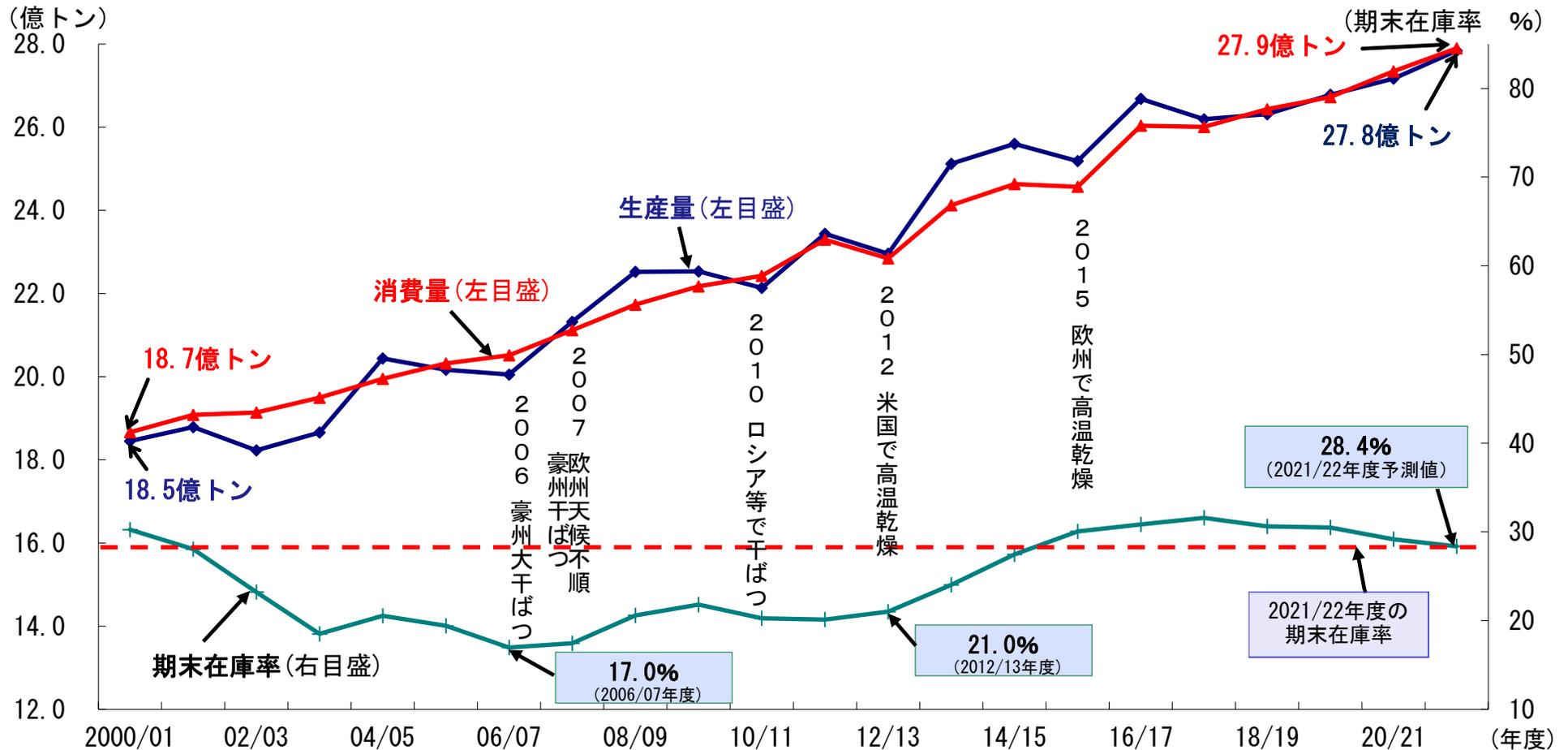
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。ただし、2022年2月4日現在のコメ価格は1月26日の価格である。(2月2日の価格は未公表)

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2021/22年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2021/22年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.4%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

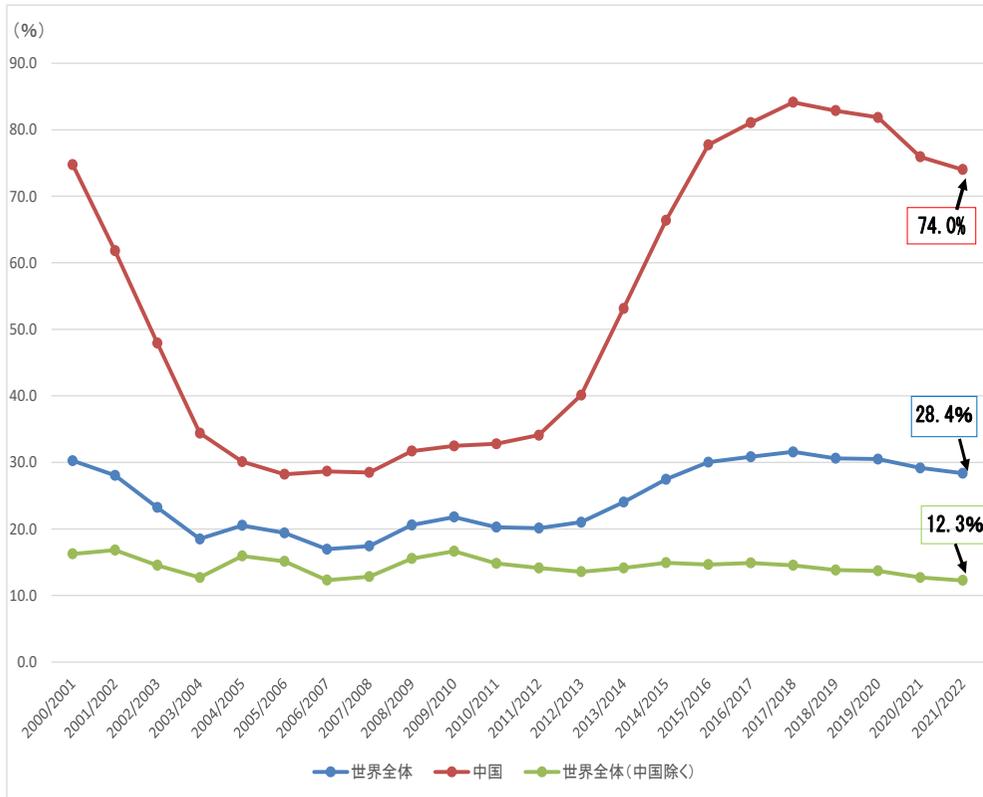


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(February 2022)、「PS&D」

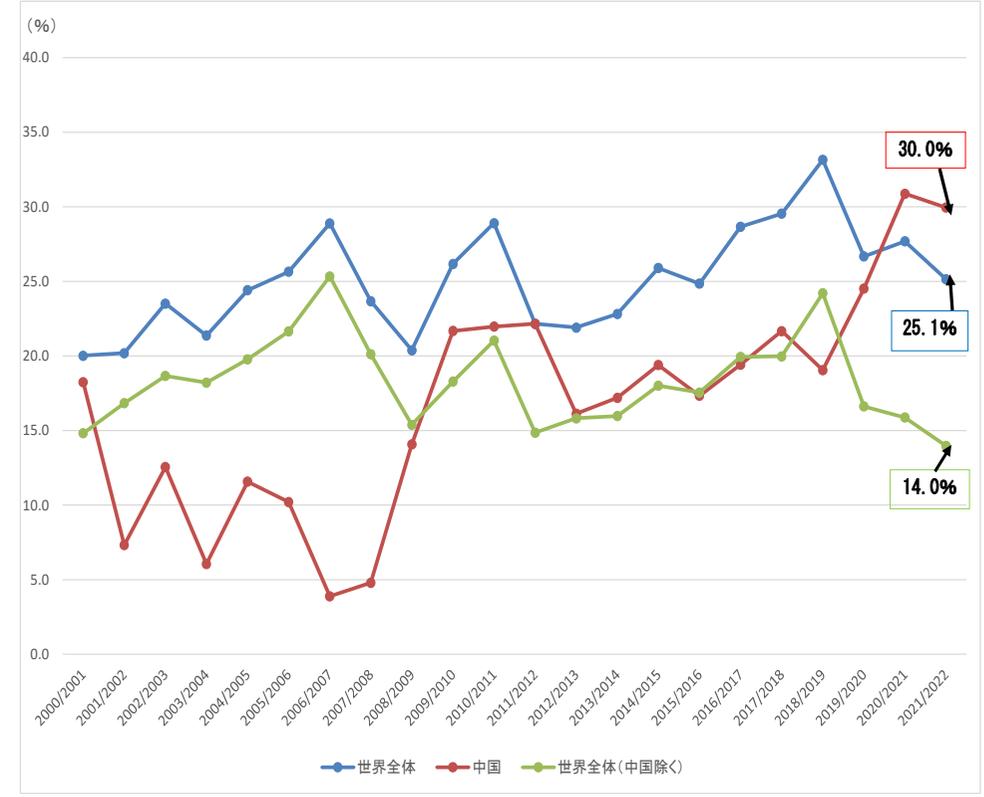
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(February 9, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

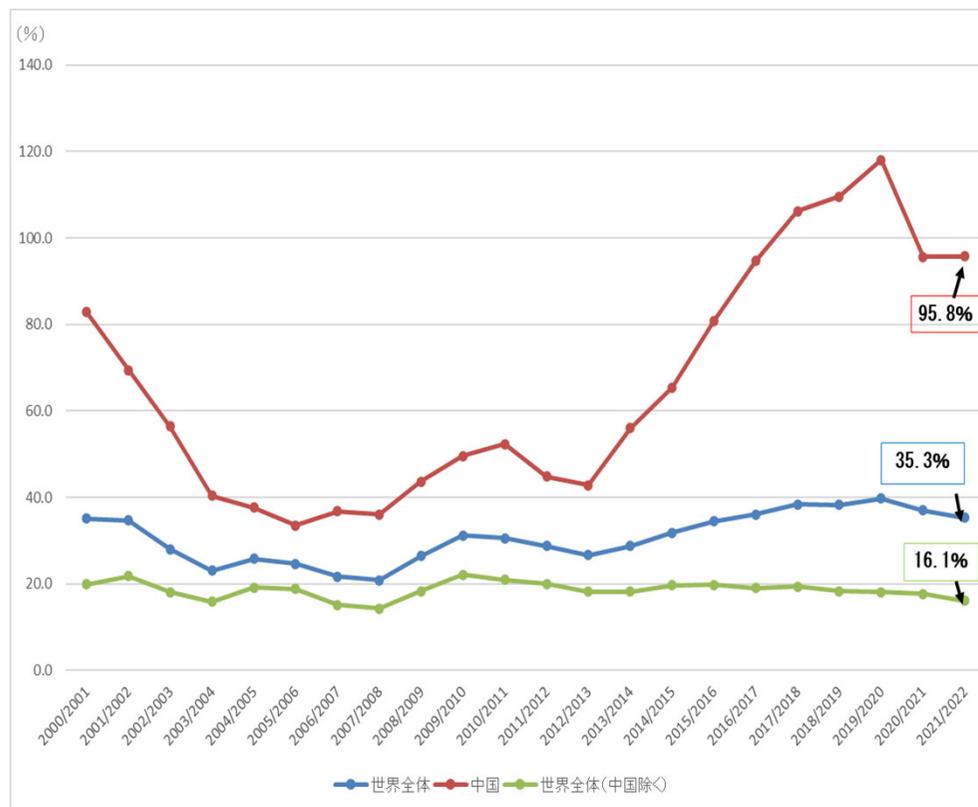
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

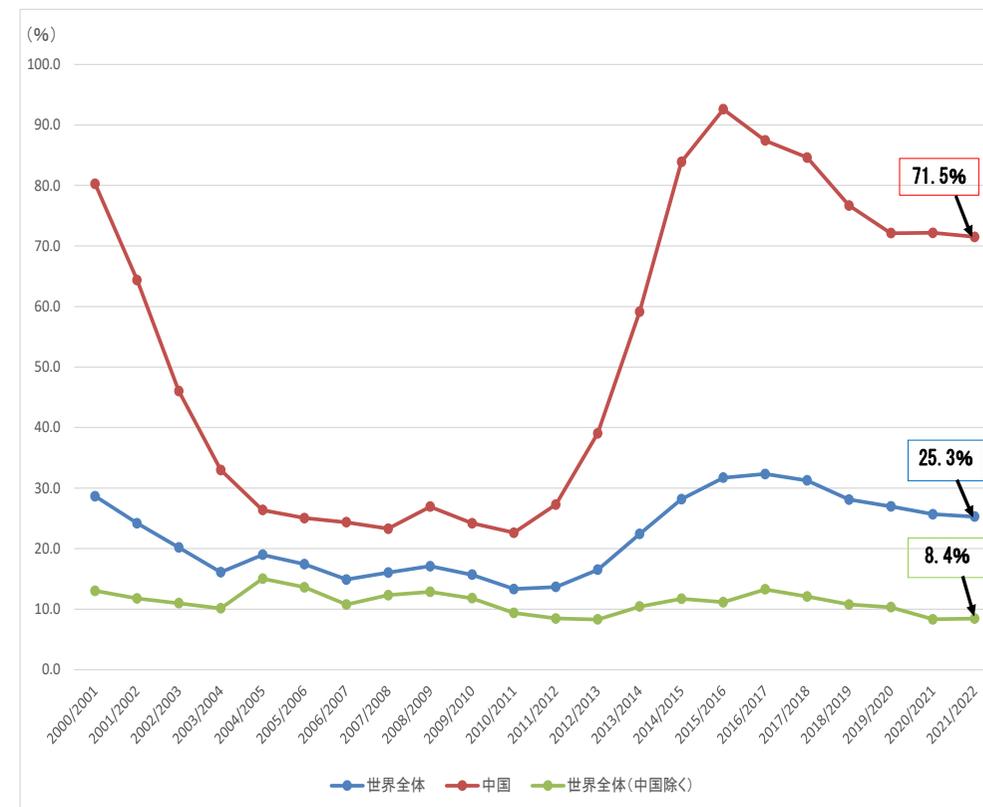
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料：米国農務省「PS&D」(February 9, 2022)

注：1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

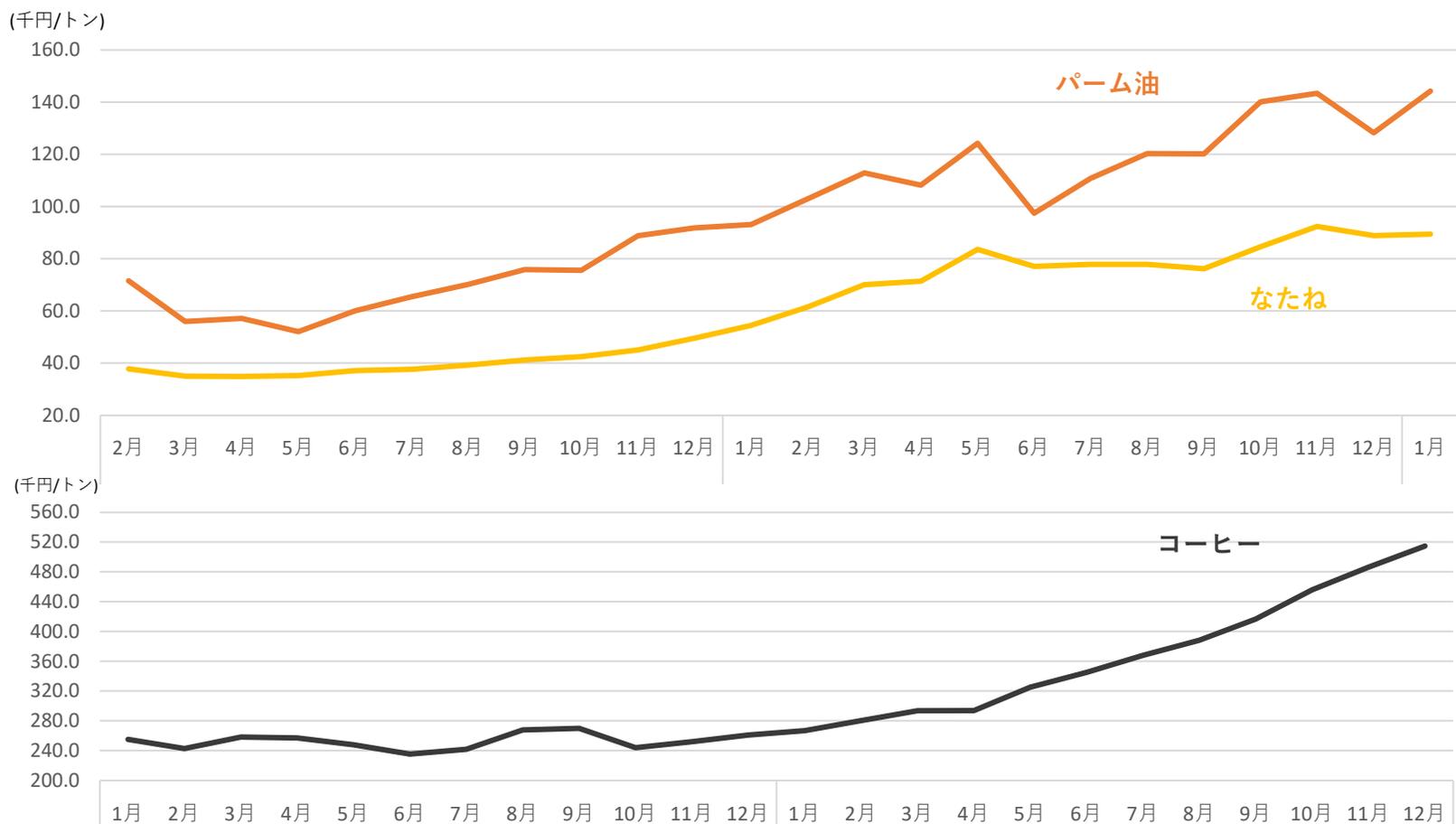
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。



2022年2月16日現在
□内は2020年2月以降の最高値。

パーム油
144.2千円/トン
144.2千円/トン
(2022.1)

なたね
89.4千円/トン
92.4千円/トン
(2021.11)

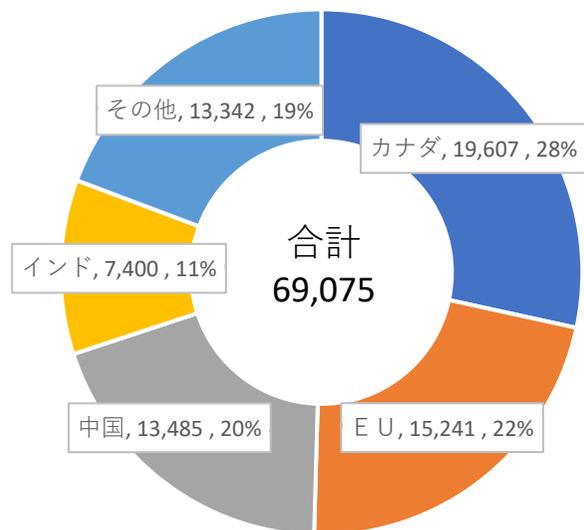
コーヒー
514.7千円/トン
514.7千円/トン
(2021.12)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4 - 2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

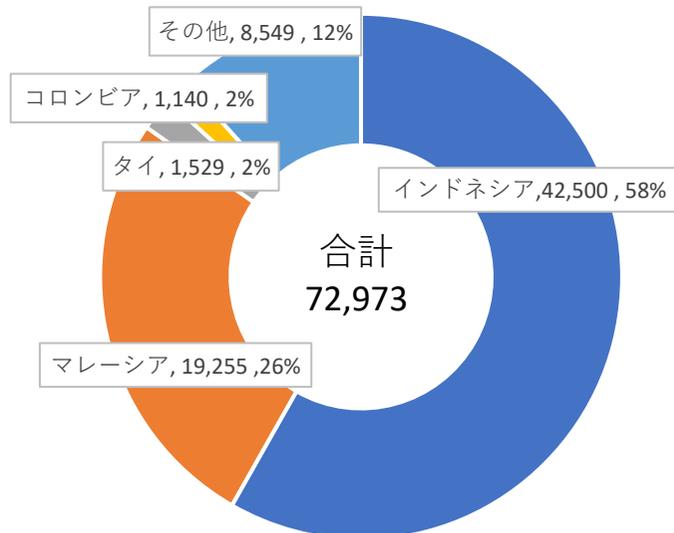
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2019/20）
（単位：千トン）



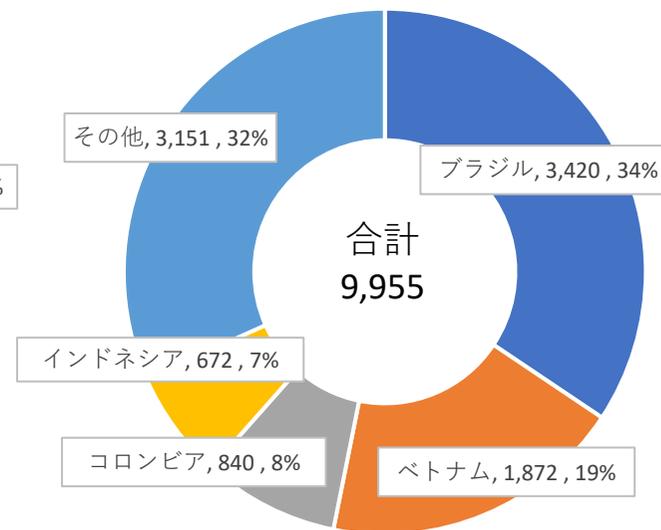
※米国農務省穀物等需給報告

パーム油生産量（2019/20）
（単位：千トン）



※米国農務省穀物等需給報告

コーヒー生産量（2019）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2020年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,194	97.4%
オーストラリア	59	2.6%
その他	0	0.0%
合計	2,252	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	447	58.8%
インドネシア	313	41.2%
その他	0	0.0%
合計	761	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	117	29.4%
ベトナム	101	25.2%
コロンビア	61	15.2%
その他	120	30.2%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年												2021年												2022年
	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	
なたね	37.8	35.0	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	
前月比	94.7	92.6	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	
前年同月比	94.9	91.6	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2021年												2021年												2022年
	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	
パーム油	71.6	55.9	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	
前月比	90.0	78.2	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	
前年同月比	115.7	96.0	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4 - 4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年												2021年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	255.2	242.8	258.3	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7
前月比	90.9	95.2	106.4	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8
前年同月比	104.8	98.3	108.5	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料:FAO「Food Price Index」(2022.2)より作成

注:穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

資料6 食品小売価格の動向

○ 令和4年1月の国内の加工食品の消費者物価指数は98.3～124.6(前年同月比で-1.3%～25.6%)の範囲内。

消費者物価指数(総務省)
(令和3年8月～令和4年1月)

品目	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3					R4	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月	1月	
食パン	99.9	99.6	100.2	101.1	100.0	99.4	99.3	99.6	99.7	100.0	103.2	4.0%
即席めん	96.2	95.7	95.3	98.5	100.0	100.2	99.6	100.9	101.0	98.5	100.4	0.3%
豆腐	98.1	98.6	98.8	99.1	100.0	100.8	101.6	102.0	102.6	102.5	102.3	2.0%
食用油 (キャノーラ油)	106.3	102.7	101.5	100.9	100.0	107.9	113.9	118.1	120.5	121.6	124.6	25.6%
みそ	97.1	96.9	97.4	99.1	100.0	98.9	100.0	99.2	99.6	97.6	98.3	-0.5%
マヨネーズ	103.8	102.3	100.8	100.7	100.0	110.2	111.2	112.4	112.5	112.0	112.3	12.9%
チーズ	97.7	97.3	100.9	101.3	100.0	100.6	100.6	98.4	95.9	95.3	98.5	-1.3%
バター	99.0	99.3	99.5	99.9	100.0	99.8	99.9	99.9	99.8	99.9	99.7	-0.1%
生鮮食品を 除く食料	96.1	97.0	97.9	99.0	100.0	100.1	100.4	100.7	101.0	100.9	101.2	1.3%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査(農林水産省)
(令和3年8月～令和4年2月)

品目	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3					1月	2月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
	平均	平均	平均	平均	平均	8月	9月	10月	11月	12月				
食パン	99.0	97.6	97.9	101.3	100.0	97.5	98.8	98.6	98.2	98.4	102.1	105.3	3.1%	5.6%
即席めん	92.8	92.6	92.4	97.9	100.0	99.0	99.0	99.0	99.0	97.8	98.4	98.4	0.0%	-1.2%
豆腐	102.2	100.8	100.1	100.9	100.0	101.1	105.0	100.7	101.1	100.7	101.6	101.1	-0.5%	-0.5%
食用油 (キャノーラ油)	99.6	97.9	97.9	103.5	100.0	106.1	109.0	112.8	115.3	116.3	119.1	122.9	3.2%	26.3%
みそ	90.3	91.9	96.6	100.4	100.0	99.0	102.7	98.4	98.8	97.5	97.7	98.1	0.4%	-2.3%
マヨネーズ	99.9	99.1	97.9	103.1	100.0	105.9	106.6	106.6	106.6	105.6	105.9	105.9	0.0%	7.0%
チーズ	95.5	95.2	98.6	100.9	100.0	99.1	103.0	98.6	93.6	92.1	98.6	98.6	0.0%	-2.4%
バター	98.2	98.8	99.0	99.5	100.0	99.5	99.5	99.9	99.7	99.7	99.7	99.7	0.0%	-0.2%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。